UNESCO

MIL + ESD

HandBook

平成 27(2015)年度版
福島ESDコンソーシアム(FEC)活動報告

福島とネパールの子どもたち

ビデオレターがつないだ であいのキセキ

FEC
Fukushima ESD Consortium

平成27(2015)年度版 福島ESDコンソーシアム(FEC)活動報告

福島とネパールの子どもたち

ビデオレターがつないだ
であいのキセキ

目次

目次 ---------- 2
ユネスコ憲章前文・MIL 政策と方略ガイドライン ---------- 3
本パンフレットについて ---------- 4
日本ユネスコ協会連盟からのメッセージ ---------- 5
ユネスコ・バンコク事務所からのメッセージ ---------- 6
＜実践編＞
福島とネパールの子どもたち　であいの軌跡 ---------- 7
白方小学校の ESD ～ ESD の日常的な実践を通して --------- 8-9
白方小学校　ネパール特別授業 ---------- 10-11
ビデオレターの制作 ---------- 12-17
完成発表会 ---------- 18
完成したビデオレター ---------- 19-21
ネパール・チャンディカデビ小学校 ---------- 22-23
ビデオレターの上映 ---------- 24-25
チャンディカデビ小学校 撮影と取材 ---------- 26-29
チャンディカデビ小学校 編集の様子 ---------- 30-31
ネパールからのビデオレター ---------- 32-37
白方小学校での上映会 ---------- 38-41
チャンディカデビ小学校長からのメッセージ ---------- 42
児童が身につけた「4 つの力」---------- 43
＜解説編＞ 44
福島・ネパール　ビデオレターの実践について ---------- 45-50
ビデオレターを活用した MIL+ESD の方法 ---------- 51-57
ユネスコ・カトマンズ事務所からのメッセージ ---------- 58-59
ユネスコの MIL に関する主な宣言 ---------- 60-61

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信を起こした共通の原因であり、この疑惑と不信の為に、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。

ここに終わりを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代りに、無知と偏見を通じて人種の不平等という教養を広めることによって可能にされた戦争であった。

文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、かつ、すべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神を持って、果たさなければならない神聖な義務である。

（「ユネスコ憲章」前文 1945 年）

ユネスコは、社会的対話を呼び起こし、世界中の市民が基本的人権と自由の完全な恩恵を得る力を与えるためにMIL（メディア情報リテラシー）が不可欠であると考える。

（ユネスコ「MIL 政策と方略ガイドライン」2014 年）

本パンフレットについて

この小冊子は平成27年度「福島 ESDコンソーシアム」の活動成果の一部として、須賀川市立白方小学校とネパールのチャンディカデビ小学校のビデオレター交流プロジェクトの経過と背景にある考え方を紹介したものです。

「福島 ESD コンソーシアム」は、法政大学が日本ユネスコ国内委員会・文科省の「グローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業」として、これに賛同する福島大学や福島県内の教育委員会、ユネスコスクール、ユネスコ協会、企業等が構成する組織です。「グローバル人材育成」に向けて、ユネスコの ESD にメディア情報リテラシー（MIL）プログラムを組み合わせています。本コンソーシアムはユネスコの MIL プログラムを採用する日本で最初の団体です。そのために本コンソーシアムはユネスコ本部およびバンコク、北京、カトマンズの各事務所と協力しながら事業を進めています。

本書は二部に分かれています。前半は実践の様子で撮影された写真で構成されています。そして後半では本コンソーシアムを支えるユネスコの MIL+ESD プログラムとビデオレタープロジェクトについての解説になっています。

平成 27 年度の福島 ESD コンソーシアムの事業は、須賀川市立白方小学校と只見町立朝日小学校にタブレットを 10 台ずつ貸与し、それらを使って児童が映像作品の作り方を学ぶところから始まりました。そのようにして身につけたスキルを ESD の学習活動に用いることができるようになりました。そして次のステップは海外の小学校との交流です。

白方小学校が選んだ交流相手は4月に大地震によって大きな被害を受けたネパールの山奥の小学校でした。同じ震災を経験した児童がビデオレターを交換しました。見たこともないネパールの山奥の様子を想像しながら、白方小学校の児童はどんなメッセージを伝えようとしたのでしょうか。そして、それを見たネパールの児童はどんな返信ビデオレターをつくり、白方小学校の児童はそれをどのように受け止めたのでしょうか。こうして遠く離れた二つの学校の新しい学びが始まりました。

なお､本プロジェクトは『届け！僕たちのエール　福島から世界へ』(毎日映画社)ドキュメンタリー作品として制作を進めています。放送・配信方法については未定ですが、今後「福島 ESD コンソーシアム」Facebook ページにてお知らせする予定です。

坂本旬
法政大学キャリアデザイン学部 教授
福島 ESD コンソーシアム代表

日本ユネスコ協会連盟からのメッセージ

ユネスコスクールは、その憲章の理念を学校現場で実践するために、1953 年にユネスコ共同学校プロジェクト・ネットワーク（ASPnet）として発足した。長らく低迷していたが、日本の提唱で設定された 2005 年からの「国連 ESD10 年」を契機に、ESD の拠点としての位置づけが明確にされ、急速に息を吹き返した。平成 27 年 6 月現在では 182 か国で約 1 万校が加盟、中でも日本では 939 校が参加している。（ACCU 調べ）

そして、各地域の教育委員会、大学や企業、市民団体（特にユネスコ協会）の連合体をコンソーシアムとして形成し、ユネスコスクールに加盟していない学校においても ESD の教育と実践を促すこととなった。かくて、平成 26 年度にはユネスコ活動費補助金（グローバル人材の育成に向けた ESD の推進事業）が 4 つの大学と 1 つの教育委員会に助成された。翌平成 27 年度には予算額も増額され、10 のコンソーシアムが補助対象として採択された。本コンソーシアム(法政大学「グローバル人材育成を目指した福島原発被災地域におけるメディア活用型 ESD 地域学習支援モデルの創造」）も助成の対象の一つとされた。

他の 9 つのコンソーシアムがそれぞれの地域における ESD の推進を目的としているのに比べて、本コンソーシアムは著しい特徴を持つ。その第一は福島原発被災地域のユネスコスクールを活動対象としていること、第二にメディア活用型の学習支援モデルの創造を目指すとともに全国的な展開をしている新聞社（具体的には毎日新聞社）との連携を重視していること、そして第三にユネスコスクール、教育委員会の他に当該地域で活動する民間のユネスコ協会とも連携していること、があげられる。

コンソーシアムが形成された時期において、福島県では 3 校のみがユネスコスクールに登録していた。（現在はさらに 2 校が加盟。）その 3 校を対象とする本事業は、この地域の特殊な事情（原発被災地域）ということもあり、しかもメディア活用型という方法を採用している点でも、まことに当を得たものとなっている。現在では東北地域で 87 校に達するユネスコスクールは、韓国、中国、ベトナム等のユネスコスクールとの交流を試みており、さらには国連大学高等研究所とも理論面での連携の輪を広げている。そうした背景もあり本コンソーシアムの活動が、ここからどのようなモデルが生み出されるか、東北地域に限らず、国境を越えた関心が集まる所以である。その期待に応えることが責務であるといえよう。

鈴木佑司
法政大学 名誉教授
日本ユネスコ協会連盟副理事長

ユネスコ・バンコク事務所からのメッセージ

私は皆様の福島における MIL+ESD プロジェクトを意義あるものとして、高く評価しております。メディア情報リテラシーはグローバル・シチズンシップ教育の重要な要素です。2015 年5月に韓国のインチョンで開催された世界教育フォーラムは平和や寛容、人間性の実現、持続可能な開発にとって教育は重要であることを示しました。当然ながら、グローバル・シチズンシップ教育は「持続可能な開発目標（SDGs）のための教育 2030」、とりわけ第4目標第7項で重要なアジェンダとして扱われ、優先課題とされました。

なぜならば、グローバル・シチズンシップ教育は、(1) 批判的に現実世界の課題を分析し、創造的で革新的な解決方法を見出せるように、勇気づけることができる、(2) 多数派の言論の中での世界観や権力関係、人々や集団を組織的に軽視もしくは無視するような物の考え方を変える事ができるように学習者を支援し、(3) 差異と多様性を尊重し、(4) 望まれる変化をもたらすような取り組みに焦点を当て、(5) 地域やより大きな社会領域の学習環境の外側を含め、さまざまなステークホルダーを巻き込むような変革的教育としての可能性を持っているからです。

多くの国で政府は若者に対するメディアの「悪影響」を心配しています。批判的なメディア活用を進めることはとても大切な取り組みです。しかしユネスコは、国家のメディアや情報の検閲の正統化のためにメディア情報リテラシー・プログラムを用いるのではなく、むしろ表現の自由をよりいっそう推進するために用いるべきであると強調しなければならないと考えています。

ユネスコ・バンコク事務所
コミュニケーションと情報アドバイザー
Ito Misako

実践編

福島とネパールの子どもたち　であいの軌跡

FUKUSHIMA

白方小学校の ESD～ESDの日常的な実践を通して

NEPAL

福島県須賀川市立白方小学校長
古田 浩

本校は福島県の中央部にある須賀川市の西部に位置します。田園地帯の中に立ち、近くには里山もあり、豊かな自然に恵まれています。また、広い校地内には農村公園や学校農園、ビオトープ等があり、震災前は生活科や理科の観察学習、総合的な学習の時間の環境学習を展開してきました。

しかし、東日本大震災や福島原発の事故により、子どもたちの外での活動を制限せざるを得ませんでした。あれから 4 年半が過ぎ、ようやく学校は落ち着きを取り戻してきましたが、里山や森林等の除染は見通しが立たず、校地以外の体験学習の実施は制限されている状況です。

しかし、子どもたちは毎日元気に登校し一生懸命に学習活動を続けています。このような状況の中だからこそ、現状をしっかり見つめ「未来を切り拓くたくましい子どもたちを育てたい」と考え、これまでの教育活動を ESD の視点から見直すとともに、制限された状況のなかでも、日常的に実践できる ESD について追求していきたいと考え、研究を進めています。

白方小の ESD の実践

本校では ESD を意識した教育活動を展開するために、ESD カレンダーを作成し、各学年の縦のつながりや各教科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動・外国語活動などの横のつながりを意識し、各教育活動を横断的・発展的に取り扱う指導方法を模索中です。

その中でも本校の特徴的なものが、ビオトープでの学習です。

トンボ研究家のご指導をいただきながら、子どもたちはビオトープの小川でオニヤンマの産卵から羽化までを自らの目で観察し、感動を味わいます。その感動をもとに、トンボの不思議や特徴、オニヤンマの短い一生、オニヤンマの生活、そしてトンボの歴史へと視野を広げ、ひいてはトンボの絶滅の危機にも気づくなど、探究活動が深まって行きます。そして、その原因が私たち人間の生活にあることを知り、自分たちの生活のことだけを考えるのではなく、全ての生き物の共存を願うようになります。子どもたちは、ここ白方の水の流れを守っていくことの大切さを学び、自分たちにできそうなことを考え、学習したことを発信しています。

これらの学習で培われた環境に関する関心は、その後の学習や児童会活動にも広がっています。

白方小のこれからの ESD

これまでは「環境の学習」を中心に進めてきましたが、「環境問題」を学習していくと、それだけを追究しても解決できる問題ではなく、「エネルギー」「人権や命」「地球環境」そして「国際（異文化）理解」等まで考えないといけないことに気づかされます。

そんな折、法政大学と毎日新聞社のコンソーシアムに参加させていただくことになりました。法政大学の坂本教授と学生さんの懇切丁寧なご指導により、子どもたちはあっという間にタブレット端末の操作を身に付け、10 月末の「祖父母参観」では、自分たちで作った作品を保護者や地域の皆さんに発表することができました。メディアを活用した新たな学習づくりの可能性が広がりました。

まだまだ未熟な取り組みですが、豊かな自然に恵まれたここ白方の環境を生かし、身近な自然に関わったり、調査したりなどの体験活動を通して、自然環境と人間や社会との関わり・つながりに気づき、自分にできること、やるべきことの意識を高め実践できる児童を育てていきたいと思います。

「祖父母参観」での 6 年生の発表の様子

FUKUSHIMA

白方小学校

ネパール特別授業

11 月 26 日

NEPAL

ネパール特別授業を担当した NPO 法人「国際学校建設支援協会（ISSC)」の石原ゆり奈さん。

ネパールを知ろう

ネパール大震災の被害の様子を説明する「国際学校建設支援協会(ISSC)」の武村佳奈さん。

ネパールの文化とネパール大震災、交流するチャンディカデビ小学校の話に真剣に耳を傾ける子どもたち。

ネパールの位置を地図で調べます。

FUKUSHIMA

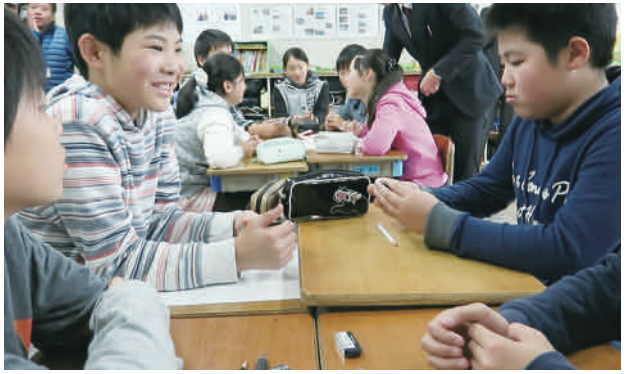
白方小学校

ビデオレターの制作 1

12 月 9 日

NEPAL

チャンディカデビ小学校から送られてきた絵を読み解きます。

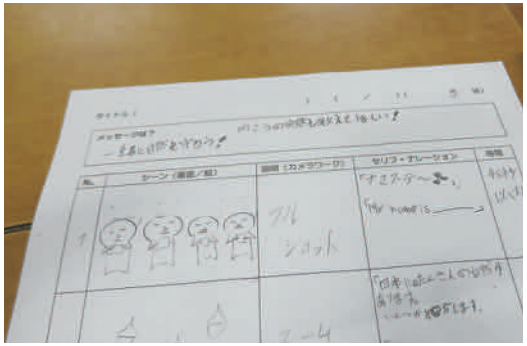


テーマを決める

相手にどんなメッセージを送りたいのか、考えながらテーマを決めます。左の写真はテーマを決めるために使った付箋紙です。このような方法を KJ 法と呼びます。

学校図書館を使って話し合います。

絵コンテを作る



班ごとに話し合いながら、絵コンテを作っていきます。絵コンテはビデオレターの設計図にあたります。

下の写真は班ごとに制作中の絵コンテを発表し、他の班の意見を聞いているところです。

FUKUSHIMA

白方小学校

ビデオレターの制作２

12 月 11 日

NEPAL

絵コンテができあがったら、絵コンテにそって撮影をします。手ブレしないように両手でしっかりとタブレット端末を持ちます。

撮影・編集

撮影した映像をみんなで確認して、編集します。

校長先生にインタビュー取材をしました。

FUKUSHIMA

白方小学校

完成発表会

1月14日

NEPAL

発表会に参加した5年生がビデオレターの評価や感想を書きました。

完成したビデオレター

オープニング

ネパール語であいさつ

遊びの紹介（だいこん抜き）

ネパールではどんな遊びをしていますか？

ペットボトルのキャップのリサイクル

運動会の紹介

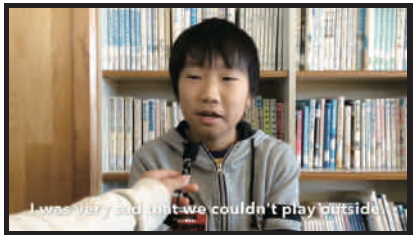
教室のそうじ

日本の四季

松ぼっくりに絵具で
色をつけました

学校の絵を描きました

震災時の思い出を
インタビューしました



家族に震災のときの様子を
聞きました

震災で壊れた家屋

避難訓練の様子

エンディング

FUKUSHIMA

ネパール
チャンディカデビ小学校

NEPAL

1. チャンディカデビ小学校

チャンディカデビ小学校はネパールの首都カトマンズの北方 80 キロの距離にあります。距離は遠くありませんが、道路が整備されていないため、未舗装の山道を車で 4 時間かけてようやくたどり着きます。小学校のあるヌワコット郡はネパール大震災で甚大な被害を受けました。チャンディカデビ小学校の元の校舎も地震による落石のため、屋根がほとんど壊れてしまい、使うことができなくなりました。卒業生が描いたかわいい壁画も無惨な姿となりました。

この学校は NPO 法人国際学校建設支援協会の奨学金支援校の一つで、トタンの仮設校舎を建てており、教員室と教室として使っていますが、他の教室はトタンと竹とむしろだけで作られた簡素なものです。政府から支給されているのはトタンだけだったため、村人が協力して建てました。それでも足りないため、青空教室で授業をすることもあります。現在は幼稚園児から小学校 5 年生まで約 80 人の子どもが通っています。

校舎だけでなく、ノートと鉛筆や授業用の教材、食料などあらゆるものが不足していました。特に音楽の学習ができないため、楽器がほしいとのことでした。

学校のある村は山の上にあり、農業と畜産が主な産業で、とてものどかなところです。民家では鶏や牛、水牛、ヤギが飼われており、庭にはバナナやコーヒーの木もあります。

しかし、地震によって 600 軒の民家が全壊もしくは半壊してしまい、10 ヶ月たっても住民はトタン屋根で補修しただけの家やテントで暮らしています。

日本からのビデオレターを見た子どもたちの母親に話を聞いてみました。ビデオレターの映像はとてもすばらしかったが、特に興味深かったのは子どもたちが掃除をしているシーンだったそうです。

日本から支援に来ている人が多いため、日本に対する印象はとても良いとのことでした。今までインタビューをされたことがなかったので、インタビューされてとてもうれしいという言葉が印象的でした。

FUKUSHIMA

チャンディカデビ小学校

ビデオレターの上映

1月 19 日

NEPAL

子どもたちから大歓迎されました。

白方小学校のビデオレターを熱心に見つめる子どもたち。

通訳は国際学校建設支援協会のゴクールさん

教室が足りないため、まだ青空教室が行われています。

FUKUSHIMA

チャンディカデビ小学校

撮影と取材

1月 20 日

NEPAL

タブレット端末で
撮影の仕方を教え
ています。

撮影を学ぶ

飼っている牛の撮影

撮影

家族の仕事を
取材しました。

家の中に備蓄されている
トウモロコシ

被災した家屋を
撮影しています

チャンディカデビ小学校の子どもたち

どちらの写真も子どもたちが自分で撮影しました。タブレット端末で撮影の仕方を覚えると、すぐに使いこなせるようになりました。そして村の中を走り回り、たくさんの映像を撮影しました。

FUKUSHIMA

チャンディカデビ小学校

編集の様子

1月 21 日

NEPAL

シナリオ作り

絵コンテを作る時間がなかったため、
撮影した映像を見ながらシナリオを書き、
それにそって編集しました。

ナレーションを録音します。

上映

できあがったビデオレターを
みんなで視聴しました。

ネパールからのビデオレター

登校の様子です。

震災で壊れて
使えなくなった旧校舎

現在はグランドに
仮の校舎を建てて使っています。

ボランティアの協力に
よって建てられた
トタンの壁の校舎です。

みんなで山登りをしています。

山の上から見た校庭

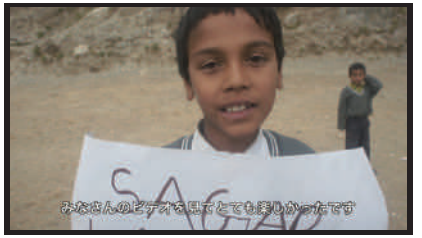
チュンギと呼ばれる
遊びです。

白方小学校のビデオレターと同じように松ぼっくりに色を塗りました。

はやっている遊びを紹介しています。

自宅の調理の様子です。

震災で壊れた自宅を紹介しています。



ひとりずつ自己紹介してくれました。

FUKUSHIMA

白方小学校での上映会

2月8日

NEPAL

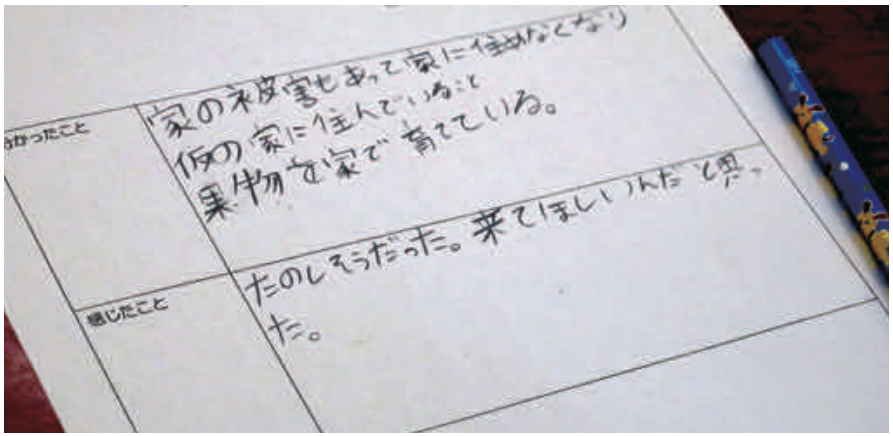
ネパールからのビデオレターを読み解く

ネパールから届いた返信ビデオレターを上映。上映前に自分たちが作ったビデオレターを思い出し、伝えたかったことや知りたいことを班ごとにまとめます。

ビデオレター視聴の視点を話し合ってから映像を上映します。

チャンディカデビ小学校のビデオレターを視聴して、わかったこと、気がついたことを話し合って発表します。

班ごとにわかったことをまとめます。



クラスで話し合ったことをまとめたら、もう一度ビデオレターを視聴します。すると子どもたちは一回目の視聴では気がつかなかったことに気がつきます。そしてネパールからのビデオレターのメッセージを文章にまとめます。

チャンディカデビ小学校長からのメッセージ

2016 年 1 月 21 日

チャンディカデビ小学校と村にお越しいただいてありがとうございました。私たちは世界に向けて情報発信する活動に誘い入れていただいたおかげで、グローバル・ネットワークに参加することができ、大変感謝しています。

皆様もご存知のように、ネパールでは 2015 年 4 月 25 日の大震災が起きました。私たちの家も学校も壊れ、そして私たちの心も壊れてしまいました。あらゆるものがダメージを受け、破壊されてしまったのです。私たちは幸いにも地震のあとも生き残り、こうして皆様と話をし、コミュニケーションをすることができます。また、教師も子どもたちも地震で命を落とさずに済みました。

しかし、骨組みが壊れ、あるいはダメージを受けてしまったところには、もういることができません。いま、私たちは薄い板や竹、木材で作られた小屋にいます。冬の夜も夏の昼間も過ごすのが大変です。

さらに私たちは貧しいため、新しい家も学校も建てなおすことができません。子どもたちのための食べ物も衣類も文房具も不足しています。こんな困難な状況の中でも子どもたちは学ぶために学校に通っています。私たちには子どもたちのために質の高い教育を可能にしてくれる校舎も教材も備品もありません。校舎は私たちに一番必要なものです。

私たちはみんな皆様が行動を起こし、校舎を建てることで私たちの傷を癒やしてくれることを希望いたします。私たちはもう一度私たちを選んでくださることを望んでいます。そうすれば子どもたちはとても幸せでしょう。

チャンディカデビ小学校長
ラム・クワナ・アジカリー

児童が身につけた「４つの力」

「伝える相手の気持ちを考えること」これは、本校６年生児童が、ネパールのチャンディカデビ小学校へビデオレターを送るにあたり、最後まで意識し続けてきたことです。

これまで、児童は、４年生でオニヤンマの学習、５年生で岩瀬きゅうりの学習を経験し、物事を多様な観点で見ることができるようになってきていました。そして今年度、本校の「福島ＥＳＤコンソーシアム」への参加と６年生の「ネパールとの交流」のお話をいただきました。地域や環境を中心に学習してきたことを発展させ、「異文化理解・国際交流」まで学習活動の幅を広げることができることになったのです。この学習のことを伝えた時、児童は、当初、新しい世界に飛び込む不安と好奇心が入り混じっていたようでした。

ビデオレターの制作に先立ち、児童は法政大学の坂本先生にご指導をいただきながら、iPadで3度の映像作品作りを経験していました。この学習を通して、撮影や編集にも慣れ、スキルが身に付いた児童は、画面の構図を工夫し、動画と写真を上手に組み合わせて使えるようになってきたのです。その児童の飲み込みのはやさには、担任の私も驚きました。

しかし、同じ映像作品でも、ビデオレターを作成するとなると簡単ではありませんでした。最も悩んだのは、「何を、どう伝えるか」です。「同じ震災を経験したネパールの子ども達へビデオレターを送って励まそう！」と意気込んでスタートしましたが、白方小の紹介だけでは、「何を伝えたいのか」がよく分かりません。子ども達は悩み、アイディアを出し合いました。

今回の学習を通して、児童には、４つの能力・態度が身に付いたと考えています。１つ目は「未来を予測して計画を立てる力」です。どこで、どのような予定で動画を撮影すればよいのかを考え、絵コンテを描く姿が見られました。撮影に優先順位をつけて活動する様子には、私も驚きました。２つ目は「異文化の理解と尊重」です。１１月２６日（木）には国際学校建設支援協会の石原ゆり奈さんに来ていただき、ネパールがどのような国なのか教えていただきました。

初めは、「ネパールの生活はかわいそう…」と口にしていた子ども達でしたが、話を聞いていくとネパールの人達がとても楽しく生活していることや、子ども達が元気に遊んでいる様子が分かり、自分達と変わらないことを感じ取っていきました。そして「交流してみたい」という気持ちが一気に芽生えてきました。石原さんは、子ども達のネパールに対する意識を「もっとネパールのことを知りたい」、「ネパールに行ってみたい」へと変えてしまったのです。

３つ目は「他者と協力する態度」です。映像を作成するにあたり、各グループのチームワークが発揮されました。撮影に協力してほしいシーンがある場合には、グループの代表児童がそのことを全員に伝え、自分達でどんどん撮影を進めていく姿はとても立派でした。全員の協力を得て取り組んだ避難訓練や体育館での遊びの撮影は、とてもスムーズにできました。４つ目は「批判的に考える力」です。「ＢＧＭは演奏を録音する?」「このシーン、字幕を付けないと伝わらないかも。」と、児童が進んで話し合い、教え合い、今後どうしたらよいのかを考える姿が見られました。

この学習を通して、児童は、自信を持って自分の考えをどんどん表現することができるようになってきたのが実感できました。また、ネパールの皆さんに伝わるようにと英語を使いましたが、言い方が分からないものについては、担任やＡＬＴに進んで聞きに行っていました。「どのようにすれば分かりやすいのか、そのためにはどうしたよいのか」を児童が常に考えて制作に取り組む、すばらしい姿が見られました。

このように、子ども達が身に付けた力はたくさんありますが、それは、ビデオレターの制作を通して「相手の気持ちを考えること」を意識し続けたからこそ、身に付いたものだと思います。このような学習を通じて、グローバルな視点を持ち、将来世界の人々と協力して「持続可能な社会づくり」を担う人材を育成することができるということを、強く実感することができました。

福島県須賀川市立白方小学校　教諭
福本　拓人

解説編

FUKUSHIMA

福島・ネパール ビデオレターの 実践について

NEPAL

法政大学 キャリアデザイン学部　教授
坂本 旬

1. 福島＝ネパールの学校をつなぐ

白方小学校に真新しいタブレット端末が10 台やってきたのは7月の半ばのことです。子どもたちはタブレット端末で映像を撮影する方法を覚え、いろいろな授業で使うことになりました。二学期になると、学校紹介ビデオを作って 10 月 24 日の祖父母参観日に上映することになりました。子どもたちはタブレット端末を持ち、学校生活の様子を取材し、一つの作品に仕上げました。学校紹介ビデオ制作を通して、子どもたちは見事に映像制作をマスターしたのです。

そして、11 月からネパールのチャンディカデビ小学校との間でビデオレター交換の実践が始まりました。ご存知のとおり、4 月 25 日ネパールで大地震が起き、多くの人が亡くなりました。そして今なお、多くの人がテントや仮設住宅で生活をしています。東日本大震災を経験した福島の子どもたちがネパールの大震災を経験した同年代の子どもたちへビデオレターを送ることにしたのです。

11 月 26 日、国際学校建設支援協会の石原ゆり奈さんと武村佳奈さんが白方小学校 6 年生の子どもたちにネパールのチャンディカデビ小学校を紹介しました。子どもたちにとって、ネパールはとても遠い国です。4 月に起こった大地震はニュースで知っていても、同じ年代の子どもたちがどんな生活をしているのか、まったく知りませんでした。この授業で初めてネパールの山奥にある小学校の様子を知ることになったのです。そして、子どもたちは遠い国から送られてきた子どもたちの絵を見ました。それはたくさんの花の絵でした。

白方小学校の子どもたちは、学校生活や遊び、給食、掃除の様子や東日本大震災の体験を映像にまとめて一本のビデオレターにしました。そして年が明けた 1 月 19 日、白方小学校の子どもたちが作ったビデオレターをチャンディカデビ小学校に持って行って見せたのです。

電気はありますが、しばしば停電します。学校はトタン屋根と竹とムシロで作った校舎とトタンで作った教員室と教室のある小さな校舎があるだけです。そこに小学校 1 年から 5 年生までおよそ 100 人の子どもたちが勉強をしています。停電に備えて、プロジェクター用のバッテリーを用意しました。車で4時間の山道を登り、ようやくチャンディカデビ小学校に着くと、子どもたちが校庭に集まり、私たちを大歓迎してくれました。

チャンディカデビ小学校の
子どもが描いた絵

2. ネパールでの体験

チャンディカデビ小学校は、地震によってそれまで使っていた校舎が壊れて使えなくなってしまいました。今はトタンとムシロの仮校舎です。校舎が足りない時は外で勉強します。まず学校を立て直すことが最優先なのに、ビデオレターをやりとりする教育がほんとうに必要だろうか、そんなことをするお金があれば、少しでも早く学校を建設する方がいいのではないか、そんな思いが頭をよぎります。

しかし実際にビデオレターを上映すると、そんな不安は吹き飛んでしまいました。小さなトタンの教室は子どもたちと先生方でいっぱいになりました。上映が始まるとみんな声を潜め、食い入るようにビデオレターを見ました。日本人なら誰でも知っている小学校の日常生活も彼らにとっては初めて見る光景ばかりでした。日本の子どもたちの遊びを見て、同じ遊びがあるときはうれしそうに指をさして声を上げます。しかし分からない場面もあります。例えば、ペットボトルのキャップを集める様子は、ネパールの子どもたちには何をやっているのか見当がつきませんでした。

翌日、ネパールの子どもたちにタブレット端末を3台用意し、ごくごく基本的な撮影の仕方を教えます。本当は絵コンテを作ってから撮影するのですが、残念ながら時間がなかったため、撮影と編集だけをやることにしました。

子どもたちに言いました。何を撮影してもいいよ、日本の子どもたちに一番伝えたいことをみんなで相談して決めなさい。すると子どもたちは話し合いを始め、一番伝えたいことを教えてくれました。地震で壊れた学校や家の様子を日本の子どもたちに見てほしいというのです。決めるやいなや、子どもたちはタブレット端末を持って学校を飛び出していきました。山の斜面を駆けまわる子どもたちにはとてもついていけませんでした。

子どもたちはこの他に村の生活の様子や遊びの仕方などを撮影しました。またある子どもたちの班は、日本の子どもたちが紹介してくれた松ぼっくりに色を付ける様子とまったくと同じことをやってみせました。

最終日は映像の編集です。撮影した映像をみんなで見て、3つの班ごとに撮影した映像を使って文章でストーリーを作ります。そのストーリーに合わせて編集を行い、返信のビデオレターをつくりました。ここでトラブルが起こりました。一台のタブレット端末の調子が悪く、うまく編集ができませんでした。その班だけはパソコンにデータを移して編集することにしました。

時間が足りなくて十分な編集ができませんでしたが、最後にみんなで作ったビデオレターを見ることにしました。子どもたちは高く掲げたパソコンの画面を真剣に見ていました。ネパールの子どもたちの作った作品には二つの大きなメッセージがありました。一つは震災で壊れた学校や家の様子と、震災後生活の苦労を伝えたいという思い。そしてもう一つは白方小学校の子どもたちと一緒に遊びたいという思いです。はたして、白方小学校の子どもたちは彼らの作ったビデオレターから何を知り、何を思うのでしょうか。ビデオレターの実践にはシナリオがありません。

3. 持続可能な開発のための教育

ビデオレターの実践には、ユネスコの二つの教育プログラムが関わっています。一つは「持続可能な開発のための教育」(ESD)プログラムです。現代世界には環境や貧困、飢饉、福祉、健康、衛生、人権、ジェンダー、平等などさまざまな課題があります。

2002 年、南アフリカのヨハネスブルグで国連「持続可能な開発に関する世界首脳会議」が開かれ、「持続可能な開発に関するヨハネスブルグ宣言」が採択されました。同じ年の 12 月の国連総会に日本とスウェーデンは「国連 ESD の 10 年」を共同提案して採択されました。これが ESD の始まりです。2014 年の「国連 ESD の 10 年」と同時に「ESD に関するユネスコ世界会議」が名古屋で開かれ、その後を引き継ぐグローバル・アクション・プラン (GAP) が採択されました。

そして、2015 年9月に開かれた国連総会で 2030 年まで世界が克服すべき 17 つの目標が定められました。これを「持続可能な開発目標」(SDGs) といいます。ESD はこの新たな目標を追求することになったのです。

ESD の目標は世界的な課題を身近な地域から解決できる人間を育てることです。国連で決められた目標を追求するために、世界中の学校で取り組まれる世界的な教育運動だと言っていいでしょう。ESD は日本が国連に提唱して始まったため、とりわけ日本のユネスコ運動は熱心に取り組んでいます。全校を挙げて ESD に取り組む学校はユネスコスクールに登録されます。世界では1万、日本では 1000 校を超えるユネスコスクールがあります。ユネスコスクールでは、世界の課題を学びながら、同時に身近な地域のさまざまな課題に取り組む教育を進めています。

福島もネパールも大きな震災がありました。自然災害と防災も ESD の大きなテーマの一つです。そしてネパールは発展途上国であり、震災に加えて貧困や健康・福祉という大きな課題を抱えています。福島とネパールの学校間交流には ESD に関わる多様な学習課題を含んでいます。

4. メディア情報リテラシー

ユネスコが取り組んでいるもう一つの教育プログラムが「メディア情報リテラシー」(MIL) プログラムです。これに「異文化間対話」をつなげて「メディア情報リテラシーと異文化間対話」(MILID) と呼ぶこともあります。「メディア情報リテラシー」はメディア・リテラシーと情報リテラシーという二つのリテラシーをつないだ用語です。

もともとユネスコはメディア教育を推進してきた歴史がありますが、メディア・リテラシーという呼び方を始めたのは 2007 年に国連事務局直属組織として「国連文明の同盟」(UNAOC) が設立され、4つの主要な任務のうちの一つとしてメディア・リテラシーの普及がうたわれてからです。ユネスコは UNAOC と協力しながら、メディア・リテラシー運動を国際図書館連盟 (IFLA) が推進してきた情報リテラシー運動と統合し、2011 年に教職員研修用カリキュラムを作り、世界中に普及させる取り組みをはじめました。

UNAOC がメディア・リテラシーを重視することになった背景には、イラク戦争であらわになった深刻な文化的葛藤の状況があります。世界の平和を実現させるためには、発展途上国でも急速に普及しつつある携帯電話やソーシャル・メディアなど、新しいメディアに対応したリテラシー教育が不可欠であること、そしてそのような新しいリテラシーが平和を実現する異文化間対話に欠かせないツールであると考えられたのです。

一方、ユネスコは IFLA とともに情報リテラシー教育運動を進めていました。日本では情報リテラシーというとパソコンの使い方のようなニュアンスがありますが、ユネスコでは、情報を収集・批判的分析・整理・発信する能力のことをいい、情報リテラシー教育の担い手は図書館、とりわけ大学図書

館や学校図書館であると考えられています。そして情報リテラシーは探究学習や生涯学習に欠かせないものだと考えられています。

日本ではメディア・リテラシーを、マスメディアを批判的に読み解いて正しい情報を見抜く力だとみなされることが多いのですが、ユネスコの考え方は少し違います。正しい情報を見抜く力はメディア・リテラシーではなく、情報リテラシーです。メディア・リテラシーは情報ではなく、メディアの表現の仕方からメッセージを理解したり、つくり出したりする力のことをいいます。また、ここでいうメディアはマスメディアだけではなく、文字媒体を含むあらゆるメディアのことをいいます。

かつては映像といえばテレビでしたが、今ではインターネットを通じてスマートフォンがあればとこでも視聴できる時代になりました。映像メディアは私たちの生活や生き方に大きな影響を与えています。

その映像がどのように作られ、視聴者にどんなメッセージを与えようとしているのか、普段考えることはありません。しかし、メディア・リテラシーを身に付けて、批判的に視聴したり、制作することができるようになれば、それは大きな力となります。

また、情報リテラシーは探究する力です。自分でわからないことや解決したい問題を見つけて、未知の世界から必要な情報を探し、吟味し、レポートや論文にまとめ、それを世界に発信する力です。

このどちらのリテラシーも、世界の困難な課題を異なる文化を持った他者とともに解決するためには欠かせません。パソコンを使いこなすスキルも大事ですが、それ以上に、自分とは異なる文化や背景を持った人々と対話や協働する力が求められています。その力がいじめや暴力のない世界、戦争のない平和な世界をつくり出す原動力になっていくのです。

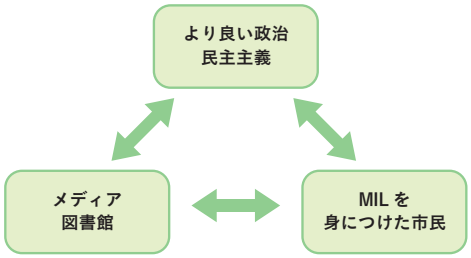
5. 民主主義と MIL

ユネスコは MIL の意義を下のような図で説明しています。MIL を身につけた市民はメディアや図書館を活用してメッセージや情報を批判的に読み解き、表現の自由を行使し、よりよい政治をつくり出す一方で、メディアや図書館は表現の自由を守り、政治権力を監視します。このように MIL は民主主義に不可欠なリテラシーなのです。

メディア情報リテラシーは決して学校の中だけのことではなく、市民社会を支える生涯学習の理念でもあるといえます。また、メディアや図書館にとっても MIL は大切な原理であり、学校関係者や教育行政関係者だけではなく、メディア関係者や図書館関係者も MIL について十分な理解をする必要があります。

ユネスコは MIL 政策を教育だけではなく、さまざまな分野で政府や自治体、NPO、企業など多様な関係者が協力し合いながら政策を進めていくことを奨励しています。

とりわけ重視しているのは子ども・青年の参加です。子ども・青年は教育を受けるだけの存在ではなく、政策の立案や運動の担い手として参加する存在であると考えられています。これは MIL だけではなく、ESD でも同じです。



6. 二つのプログラムを統合する

ユネスコとしては ESD よりも MIL の方が新しい運動であるため、日本でもこれまではあまり知られていませんでした。しかし ESD と MIL という二つのユネスコの教育プログラムを統合するという考え方は、とても理にかなっています。

もちろん同じユネスコですから、両方とも教育の目標に SDGs があります。子ども主体の学びを大切にし、探究的学習を重視する点も同じです。MIL は読み書きを意味するリテラシーを拡大したものであり、あらゆる教育の土台に位置するものです。下の図は MIL と ESD の関係を図式化したものです。

この図のように土台にメディア情報リテラシーがあり、その力を原動力としてさまざまな地域の課題を学びます。さらにそれらを「持続可能な開発目標」という世界の課題につなげていくのです。

7. 異文化間対話のための ビデオレター

技術の進歩によって、タブレット端末一台で撮影から編集までできるようになりました。ビデオレターの制作もビデオメカラを使うことなく、タブレット端末一台で作ることができます。ビデオレターの交換は単に ICT を利用した教育ではありません。

今回の実践を MIL の観点から見ると、メディアの制作と読解、そしてコミュニケーションという過程を含んでいます。つまり、相手にメッセージを伝えると同時にメディアを批判的に分析し、深く考えながらメッセージを理解するスキルを身につけることが必要です。そこには編集という大切な過程が含まれます。

あらゆるメディア・メッセージは構成されたものである、これはメディア・リテラシーの第一の原理です。その原理を学ぶためには、学習者自身がメッセージを伝えるために編集するという経験が必要です。もちろん文字媒体でも同じです。これまで行われてきた文集や学級新聞制作などがこれにあたります。

ビデオレターは目的やテーマを決め、ストーリーボード（絵コンテ）をつくり、撮影したものを編集するという過程をへて制作します。映像制作だけならば、学校紹介ビデオや学習発表ビデオと似ていますが、送り先（視聴者）が明確であることが大きな違いです。ビデオレターの交換はコミュニケーションへとつながっていきます。そして何よりも、互いの文化の理解のツールとなります。

ビデオレターは映像を使ったコミュニケーション手段ですが、他にも手紙や絵、カードの交換も同時に行うことができます。今回もネパールから福島へ絵が送られています。他の学校間交流でも絵やカードの交

換をよく行います。ICT だけではなく、多様な形式のメディアを使い分け、そのメディアとしての性格を理解することも大切です。

さらに相互理解を進めるためには、テレビ電話会議システムが役に立ちます。ビデオレターとは異なり、リアルタイムの交流ができます。臨場感いっぱいのコミュニケーション方法ですが、十分な準備が必要になります。相手が発展途上国の場合はインフラの確認も必要です。また、ビデオレターとは異なり、じっくりと観察したり、考えたりすることがむずかしくなります。テレビ会議会議システムはビデオレターと組み合わせて使うと、ビデオレターの感想や意見交換ができるため、有効に活用することができます。

8. ビデオレター・プロジェクトを世界に

海外とのビデオレター交流はビデオテープの時代からありました。しかし、MIL の観点から取り組まれたことはありませんでした。異文化交流の一つのツールという扱いでした。そのため、ビデオレター交流によって、子どもたちにどんな力を身につけさせるかという発想がなかったのです。それはこれまで子どもたちにとって映像制作が簡単ではなかったという事情があったからです。

しかし、タブレット端末やスマートフォンが急速に普及する現代社会では、映像はただ受動的に見るものではなく、自らのメッセージを世界に発信する表現方法として捉えることができるようになりました。映像は感情に訴える力があり、権力が市民をコントロールするために使われるだけではなく、市民が権力に異議を申し立てたり、世界中の市民と交流したり、新しい運動を起こすためのメディア様式としてとても重要です。ソーシャル・メディアの普及はこれらの運動が国境を超えることを容易にしました。これからの学校は、文字の読み書きと同じように映像の読み書きが必須となる時代がやってくるでしょう。それは新しい時代のリテラシーなのです。

福島＝ネパール・ビデオレター・プロジェクトは二国間だけではなく、すでにアメリカの小学校が４月から参加することになっています。子どもたちは外国語と映像という二つの新しい言語を用いて、子どもの時代から互いに理解し合う道を見つける方法を学びます。これこそが、持続可能な開発の課題の解決の担い手を育てる教育になるのです。

FUKUSHIMA

ビデオレターを活用したMIL+ESD の方法

NEPAL

ビデオレター・プロジェクトを通して身につける力

国立教育政策研究所は ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の例として、批判的に考える力、未来像を予測して計画をたてる力、多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する態度、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度の７つをあげています。ビデオレター・プロジェクトはこれら７つの要素をすべて含んだ総合的な学習です。ビデオレター・プロジェクトを制作過程、交流過程、振り返り過程の３つの局面に分けて、７つの能力態度の要素を当てはめると以下の表のようになります。いずれの局面でも７つの要素が含まれますが、とりわけそれぞれの局面で重視されるものを◎で表現しています。

制作過程はビデオレターを送る相手の理解やテーマ、絵コンテの作成が含まれます。交流過程はビデオレター交換の全体の過程を含みますが、その中心に位置するのはビデオレターの視聴です。場合によっては、視聴した後に電子会議システムを用いたリアルタイムのコミュニケーションを行います。外国語を使用する場合は、外国語によるコミュニケーションの過程を含むことになります。そして視聴や交流をしたあとの振り返り過程では、次のビデオレター制作に向けた取り組みが含まれます。

ICT 機器を利用するため、ICT スキルもこれらすべての過程には含まれますが、ICT スキルを育てることがこの実践の目的ではありません。

育成する能力・態度	制作過程	交流過程	振り返り過程
① 批判的に考える力	○	◎	◎
② 未来像を予想して計画をたてる力	◎	○	◎
③ 多面的・総合的に考える力	◎	○	◎
④ コミュニケーションを行う力	○	◎	○
⑤ 他者と協力する態度	◎	◎	○
⑥ つながりを尊重する態度	○	◎	◎
⑦ 進んで参加する態度	◎	○	◎

学校における映像制作

学校で制作できる映像にはいろいろな種類があります。ビデオレター以外に学校教育で取り組まれる映像として、デジタル・ストーリーテリングや公共広告、ニュース、ドキュメンタリーなどがあります。かつて、映像制作は放送局などの映像制作の専門家が学校と協力して実施されることが多く、教科の授業で行われることはほとんどありませんでした。技術はもちろんのこと、高価で使い方の難しい機材が必要でした。一般の教員が行うには荷が重すぎたのです。そのため、かつてはメディア・リテラシーといえば、映像の読み解きが主でした。読み解きならば、映像を視聴して考えさせることができたからです。

こうした状況も技術の進歩が大きく変えてしまいました。高校生でさえ、9割以上がスマートフォンを持っている時代です。スマートフォンには映像制作の機能があり、それを使えば、誰でも簡単に映像が作れてしまいます。ノートと鉛筆と同じように、映像制作は身近に存在するものとなりました。しかし、技術があれば、誰でも使えるようになるわけではありません。そこには教育が必要なのです。

現在のタブレット端末の技術ならば、小学校高学年でも使いこなせるようになります。これは発展途上国でも変わりがありません。初めて発展途上国の小学校にタブレット端末を持ち込んで、映像制作の授業を行った時は、大変不安でしたが、教える側の準備が充分に整っていれば、ほとんど違いはありませんでした。

どこの国の子どもたちもあっという間に使い方を覚えてしまいます。しかしタブレット端末の使い方を理解しても映像の読み解きと制作ができるようになるわけではありません。

映像の読み解きと制作

映像の読み解きと制作は表裏一体です。文字の読み書きが表裏一体であることと同じです。詩や散文のように心のなかから湧き出る思いや印象を映像にすることができます。そのような場合でさえ、映像の鑑賞には詩や散文がそうであるように、読み解き方があります。大切なのは「表現の仕方」という視点です。メディア・リテラシーの基本が「表現の仕方」への着目であることを意識しましょう。文章と同じように、映像にも文法や文体があり、修辞があります。このような「映像の技術」に注目することで、映像の読み解きの技術は制作の技術へと転化します。

ビデオレターはその両方がなければ成り立ちません。そういう意味で、ビデオレターはメディア・リテラシーの基礎であるといえます。お互いの作品がそのまま教材となるという利点もあります。毎年実践を積み重ねれば、毎年前の年に作られた作品から多くのことを学ぶことができます。ビデオレター制作には高度な技術は必要ないため、映像制作の基礎的な段階で学ぶのに向いています。

誰に送るか、どんなメッセージを送るか

ビデオレターは海外の学校に送るものと決まっているわけではありません。相手は誰であっても良いのです。国内の学校はもちろんのこと、送り先が家族や先生であっても良いし、10 年後の自分でも構いません。大切なことは、漠然と制作するのではなく、誰に向けてどんなメッセージを伝えるのかということを意識することです。どんな手紙も送り先、読み手がいます。そしてどんな映像にも想定する視聴者がいます。手紙もビデオレターもそれは変わりません。

ではその相手にどのようなメッセージを伝えたいのか、それはどのような表現方法を使えば伝えることができるのか、映像制作で時間をかける必要があるのはこの学習です。今回の白方小学校のビデオレター制作でも福本先生がもっとも苦慮したのは、どんなメッセージを送るのかということでした。単なる学校紹介になってしまうと、メッセージのわからないビデオレターになってしまいます。ビデオレターの制作は表現力の育成だけが目的ではありません。メディア・リテラシーは表現力ではなく、表現のスキルを通して批判的にメッセージを読み解き、創造的にメッセージを伝える力です。そのためにいろいろな意見を聞き、ディスカッションを行うことが大切なのです。

疑問から探究へ

メッセージを考えることは、メッセージの目的と深く関係しています。何のためにビデオレターを送るのかという問題は教師が子どもに与えるものではなく、子ども自身が考えなければならない問題です。白方小学校の実践でも、子どもたちは班で、学級で話しあい、考えを深めていきました。

たった一回のネパール紹介の授業で、ネパールの小学校や子どもたちが抱えている課題がわかるはずはありません。つまり唯一の正解を見つけるのではなく、たくさんの疑問を持つことが大切なのです。わかりたい、知りたいという思いを育てることが学びの核となります。

子どもたちが感じた疑問は、探究の種になります。その疑問は図書館で解決できるものもあれば、インターネットで検索して調べることができるものもあります。例えば、ネパールの人口や地理が知りたいのなら学校図書館を活用すると良いでしょう。しかし、ネパールの子どもが一番好きな遊びを知りたければ、ビデオレターを通じて質問すればよいのです。探究は学びの柱であり、探究のスキルが情報リテラシーです。学校図書館は読書センター、情報センター、そして学習センターとしての機能を持っています。情報リテラシーは学校図書館の活用による探究学習によって育むことができます。

メッセージを考える作業はカードや付箋紙を用いた KJ 法を活用すると良いでしょう。最初に自由にアイデアを出し合い、それらを整理しながら班ごとに伝えたいメッセージを決めていきます。

絵コンテ

伝えたいメッセージが決まれば、次のステップは絵コンテの作成です。絵コンテはビデオレターの構成を絵と文章で説明したもので、設計図に当たります。ビデオレター全体のイメージをつかむためにも不可欠です。絵コンテがしっかりできていれば、撮影がスムーズになり、時間も短くて済みます。

絵コンテの作成は一人ではできないため、多面的総合的に考える力や批判的に考える力だけでなく、他者と協力する力必要になります。さらにシーンごとに説明を書いたり、台詞を書いたりする必要があるため、文章を書く力が必要です。

下の図は絵コンテのフォーマットの一例です。左側にシーンを簡単なイラストで表現し、その右側に解説とナレーションを書きます。一番右側におおよそのシーンの時間を書き、全体の長さとの関係を調整します。班ごとに一つの作品を作る場合は、班で話し合いながら作っていきます。絵コンテができれば中間発表会をすると良いでしょう。

班で考えたことをクラス全体で話し合うことで他者の意見に耳を傾ける態度が身につきます。こうしてビデオレターの絵コンテを完成させます。

タイトル（　　）（　／　枚）　年　組　班（月　日）

NO	シーン（画面／絵）	説明（カメラワーク）	セリフ・ナレーション	時間

撮影の基本

撮影の前にフレームサイズを学ぶ必要があります。小学生ならばフルショット、バストショット、クローズアップの３種類を覚えておけば十分です。そしてそれぞれのフレームサイズの効果を学習します。特に重要なのはクローズアップです。クローズアップは視聴者に何を見せたいのか、意識させる力を持っています。子どもにフレームサイズを教えないで撮影させると、フルショットの映像ばかりになってしまいます。

人の顔を画面いっぱいにいれるとクローズアップになります。二人一組になり、お互いのフルショットや顔のクローズアップを撮影しあうことで、クローズアップの効果を理解することができます。

撮影するときは横向きにすること、脇をしめてカメラを固定すること、ワンショット５～10 秒程度にすることを教えます。また、広い場所を撮影したいときはカメラを左からゆっくりと右に動かしながら撮影するパンというカメラワークを教えると良いでしょう。また、焦点の合わせ方や露出の調整といったカメラの基本操作も教える必要があります。

す。必要に応じて三脚を使うこともあります。その場合はタブレット端末を三脚の雲台に接続するためのアダプタが必要になります。

もう一つ重要なのはマイクです。タブレット端末に内蔵されているマイクを使うと周りの音が入ってしまい、声がうまく録音できないことがあります。そのため外部マイクを用意しておくと良いでしょう。

外に出て取材をする場合は、あらかじめ取材の仕方を教えておく必要があります。カメラやインタビュー、マイク係などの分担を決めておくことも必要です。また、肖像権や著作権についての学習も必要になります。

編集

撮影が終われば編集です。タブレット端末にはあらかじめ動画編集ソフトをインストールしておきます。すでにインストールされている場合はそれを使います。これまで小学校で教えた経験から、４年生以上ならば編集することができるようになります。

絵コンテにそって編集していき、必要に応じてナレーションや音楽の録音、そしてタイトルや字幕を入れていきます。BGM はすでに用意されているものを使うこともできますが、同じ BGM を使うと同じような印象の作品になってしまいます。BGM は映像の印象に大きな役割をはたすからです。

また、BGM には著作権があることも教える必要があります。好きな音楽を自由に使えるわけではないことを理解させます。白方小学校の子どもは自分で BGM を作曲演奏しています。

編集が終われば一つの動画ファイルとして出力し、パソコンに取り込みます。この作業は教師がやる必要があります。

メディア・リテラシーの原理の一つが、「メディアは構成されたものである」というものです。その原理は実際に編集という過程を経験し、それを振り返ることによって、理解することができるようになります。撮影時ではそれはクローズアップというカメラワークに代表されますが、編集時ではトリミングがそれにあたります。必要な映像だけを選んで他のものを捨てたり、必要な部分だけを切り取ったりする作業の自覚化はメディア・リテラシーの基本原理に関わっています。

上映会

作品が完成したら、上映会を行いましょう。教室でできあがったものをそのまま上映しても構いません。タブレット端末をプロジェクターや大画面テレビに接続すればすぐに上映できます。保護者を招いて一緒に見ていただくこともできます。白方小学校では下級生に一緒に見てもらい、感想や評価をしてもらいました。上映会による振り返りはとても大切です。メッセージの伝わる作品にできあがっているか、みんなで考えながら視聴しましょう。

映像作品の制作を目的にするのならば、発表会をすれば終わりになりますが、ビデオレターの場合は、まだ続きがあります。でき上がったビデオレターを交流相手に送ります。ビデオレター以外に絵やカード、その他いろいろなものを一緒に送っても良いでしょう。

ビデオレターの送付と返信

ビデオレターはインターネット経由で送ればすぐにでも相手に届けることができますが、相手が発展途上国の場合は、簡単ではありません。白方小学校の交流相手はインターネットどころか、電気の供給もままならないネパールの山岳地帯の小学校でした。このようなケースでは、コーディネーターが不可欠です。福島＝ネパール・プロジェクトでは、その役割を福島 ESD コンソーシアムが果たしています。

また、このような取り組みをする場合は、現地の事情に詳しい NPO や現地のユネスコ事務所、日本大使館の協力も必要です。

白方小学校とチャンディカデビ小学校の場合は、NPO 法人国際学校建設支援協会やユネスコ・カトマンズ事務所、ネパール・テレビジャーナリスト協会の協力を得ています。

ビデオレターが完成したら、上映会を行います。

返信ビデオレターの視聴

交流相手校のビデオレターが届けばそれを視聴することになります。しかしいきなり見せるのではなく、まず自分たちが作ったビデオレターのメッセージを思い出させながら見る視点を班ごとに話し合わせることが必要です。そして一度目の視聴で気がついたことやビデオレターのメッセージについて再び話し合います。

するといろんな視点からの発見が出てきます。二度目の視聴でそれを確認すると、一度目には見えなかったものが見えてきます。そして新たな疑問をまとめていき、次のビデオレター制作につなげます。

白方小学校の子どもたちは自分たちの班で取り上げたテーマを意識して見るため、遊びについて紹介した班はネパールの子どもの遊びをしっかり見ようとしました。また、震災について制作した班はネパールの学校や家の被災の様子を見ています。一方で、楽しそうに遊んでいる様子に心を奪われていました。こうして、話し合いながらビデオレターのメッセージはなんだろうかと考えていきました。

ネパールからのビデオレターを見た子どもたちは、このようにして自分たちと同じだという印象を持つに至っています。子どもたちは違いを見つけるのではなく、同じであることを見つけようとします。それはビデオレターの実践でこれまでも何度も経験しています。

なぜ子どもたちは相手に同じものを探そうとするでしょうか。人間は本質的に同じであることを確認しあうようにできているのかもしれません。子どものころに異文化間対話を経験することは、さまざまなスキルを身につけるだけではなく、人間として大切なものを自分の力で見つける力を得ることにつながると感じさせられます。

このように、ビデオレターは異文化交流の方法として優れているだけでなく、ふるさとをそだて、世界につなぐ ESD の方法としても大変優れています。ユネスコスクールはもちろんのこと、異文化交流に関心のある多くの学校で、この方法を用いた異文化交流が進められることを期待しています。

ぼく達のグループは、自分達が経験した、東日本大震災について、被害や経験してどう思ったのかをインタビューなどを取り入れて、「協力」という言葉を強調して作りました。ネパールからのビデオレターには、「協力」という言葉はありませんでしたが、協力して乗りこえてきたというのは伝わりました。ネパールの友達からのビデオレターは、元気よく遊んでいる姿が多かったです。みんなで仲よく遊んでいてとても楽しそうでした。歌っているようすや登校のようすもよくわかりました。相手からのメッセージは、つらい事があってもがんばって助け合っているのだと思いました。普通の学校がほしいけれど、仮設の校舎でがんばっている姿がメッセジなのかと思いました。ぼく達も相手が見やすいようにさまざまな工夫をしてきましたがネパールの人もそうだというのが伝わりました。コンポックリに色をそめていた映像を見た時は、しっかり自分達の映像を見てくれたんだと思うととてもうれしかったです。

チャンディカデビ小学校のみなさんは私たちがつくった映像を見てどんなはんのうしましたか。私はチャンディカデビ小学校のみんなが少しでも元気になるようにと思ってつくりました。私はチャンディカデビ小学校の映像を見て私たちの生活とあまり変わらないんだと思いました。学校に行って遊んで、ごはんを食べて私たちとあまり変わりません。しかし地震は私たちよりひどかったと思います。学校がつかえなくなってしまったり、家がくずれてしまったりありましたけれどチャンディカデビ小学校のみんなは元気でした。私はまだ子どもでネパールには1人で行けないけれど大人になったらいつかネパールに行ってみたいなと思います。私が次映像を送るとしたら私の地域をしょうかいしたいです。

子どもたちの感想より

ユネスコ・カトマンズ事務所からのメッセージ

私は皆様がネパールの僻地の学校でプロジェクトを始めることができたことを喜ばしく思います。ビデオで拝見したチャンディカデビ小学校はカトマンズに近い地区にありますが、未だに僻地です。ビデオの中で話している子どもたちはとても不幸な状況にあり、皆様の仕事にとっても大きな意味があります。もう一つのビデオは皆様が日本の学校での実践で作られたものです。

このような活動はもっと規模を大きくする必要があります。多くの日本の学校、多くのネパールの学校が、このような活動で結びつく必要があります。これは単にメディアの取り組みを促進するだけではなく、確実に教育の取り組みを促進し、強化するものです。持続可能な開発目標の第４目標は、すべての人の公正で質の高いインクルーシヴな教育に強く焦点を当てており、生涯学習の機会を促進するものです。だからこそ、ネパールはこの第４目標に取り組んでいるのです。

もしこのような取り組みが拡大すれば、ネパールは確実にプロジェクトを通して生涯学習環境の促進と支援が実現されるでしょう。これは私にとっても喜ばしいことです。私たちはこの取り組みをより広い枠組みの中で、つまり教育の可能性と発展、そしてグローバル・シチズンシップ教育の中で考えます。私たちはより基本的な異文化間対話や異文化理解、市民教育、シチズンシップ教育についても考えてきました。

ご存知のように、ユネスコはこれまでも部局を超えた仕事をしてきました。例えばICT を活用した教育です。どのようにしてICT を教室で利用して、すでに存在している教育学を強化するのか。私はこのビデオを見て、学校の中に特別なカリキュラムを作れば、すでに学校の中にある教育学を強化し、促進すると思いました。ネパールの学校、日本の学校、それぞれ自分たちの文化を持っています。それぞれの国の子どもたちはお互いの文化を学びあいます。これはとても大切なことです。

私は、皆様がより多くの技術的支援とプロジェクト予算を得てネパールで活躍できるよう願っています。ユネスコは、皆様を支援し、パートナーとなることを歓迎いたします。ありがとうございました。

ユネスコ　カトマンズ事務所
国内プログラム教育担当
タップ・ラジ・パント

左から坂本旬、タップ ・ラジ・パント氏、ブゼール・バハドウル・ゴクール氏、
村上郷子氏（法政大学）

ユネスコの MILに関する主な宣言

■グリュンバルト宣言（1982）
　生涯にわたる包括的なメディア教育の必要性、教職員研修、研究の促進、ユネスコによる活動

■アレキサンドリア宣言（2005）
（ユネスコ・IFLA による生涯学習理念と情報リテラシーの結合）
・情報リテラシーは、文化的・社会的文脈の中で、情報の必要性を認識し、場所を特定し、評価し、適用し、そして情報を創造するコンピテンシーから構成される。
・情報リテラシーは個人や企業（とりわけ中小企業）、地域や国家の優位性という点できわめて重要である。
・情報リテラシーは経済発展や教育、健康、人的サービス、その他現代社会のさまざまな側面を支援するためのコンテンツへの効果的なアクセスや利用、創造のための鍵をもたらすものであり、それゆえに、ミレニアム宣言や情報社会世界サミットの目標を達成するために不可欠な土台をもたらすものである。
・情報リテラシーは学習や批判的思考、職業の範囲を越えて転換可能なスキルを包含し、個人やコミュニティを力づけるために現代技術を越えて拡大する。

■パリ・アジェンダ（2007）
・メディア教育に包括的な定義を与える
・メディア教育、文化的多様性、人権の尊重の結びつきを強める
・基礎的なスキルの定義と評価のシステム
・教員の初期研修へのメディア教育の統合
・適切で発展的な教育方法の開発
・社会空間における他のステークホルダーの動員
・生涯学習のフレームワークへのメディア教育
・高等教育におけるメディア教育と研究の発展
・交流ネットワークの創造
・目に見える国際交流の組織化と創造
・政策決定者への意識づけと動員

■フェズ宣言（2011）UNAOC
・メディア情報リテラシーに関する最初の国際フォーラム（ユネスコと UNAOC が主導）
・メディア情報リテラシーは情報が爆発的に増加し、コミュニケーション技術が収斂するデジタル時代における基本的人権であるという信念を再確認する。
・メディア情報リテラシーは人間生活の質を高め、持続可能な発展とシチズンシップを強化するものと考える
・社会的、経済的、文化的発展におけるメディア情報リテラシーの重要性を強調する。
・メディア情報リテラシーの包括的発展にとって、もっとも大きな障害は、今日、それがもたらす力の可能性に気づかれていないことである。
・メディア情報リテラシーは男女を含むすべての市民、とりわけ若い人々に焦点を当て、彼らを社会に積極的参加へと巻き込んでいく鍵であると信じる。
・メディア情報リテラシーは異文化対話や文明間の相互知識や理解へ向けた平和文化の構築のために重要な役割を果たすことができることを強調する。
・メディアや情報の共有者の間で、倫理的な価値や健全な職業実践が見られなくなり、報道機関や公共圏での監視機能が縮小しつつあることを懸念する。
・グリュンバルト宣言、バリアジェンダ、アレキサンドリア宣言を促進するために、世界情報サミット宣言とアクションプラン、とりわけ第9(メディア)アクションプランに対しても取り組む。

■ユネスコ MIL 教職員研修用カリキュラム（2011）
日本語版をユネスコのサイトからダウンロードすることができます。
http://www.unesco.org/new/en/communication-and-information/resources/publications-and-communication-materials/publications/full-list/media-and-information-literacy-curriculum-for-teachers/

■ユネスコ MILID（メディア情報リテラシーと異文化間対話）アジェンダ（2013）
（Alton,Jordi,Jose,MILID YearBook,2013）

　私たちは紛争を防ぎ、不平等を正し、協力関係を作り出し、そして互いの理解と異文化対話を育てていくための新しい道を見つけなければならない。このような背景のもとで、メディア情報リテラシーと異文化対話（MILID）ネットワークの構築が求められ、さらに私たちはその戦略的強化を追求するのである。
　ユネスコと UNAOC は、メディア情報リテラシーとそのグローバル教育への貢献が多様な文化や文明間の理解を促進するものと考える。

■ MILID アジェンダ
・デジタル認知的デバイドとの闘い
・国際的な協力と参加を刺激
・グローバル教育
・それゆえ、教育はグローバルな相互作用に対して開かれていなければならない
・グローバルな公共圏の再生
・コミュニケーションの原理と情報の原理の統合
・最後に、平和文化の創造とコミュニティと人々の間の平和的な理解がメディア情報リテラシーの究極的な原理でなければならない。これは対話なくしては誰も存在し得ず、自由と公正なくして平和はあり得ないという基本的な原理を有していることを意味している。

福島とネパールの子どもたち
ビデオレターがつないだであいのキセキ
– 平成 27(2015)年度版 福島 ESD コンソーシアム活動報告–

発行日：2016 年 3 月 30 日
編集：福島 ESD コンソーシアム
(http://www.facebook.com/fec.org/)
法政大学キャリアデザイン学部
デザイン・印刷：DIC カラーデザイン(株)
発行：(株) デジタル SKIP ステーション
〒 333-0844
埼玉県川口市上青木 3 丁目 12–63
電話　048-264-7777

NEPAL

FUKUSHIMA

法政大学
HOSEI University